



「この声は、真菜ちゃんのおばあちゃんが心の中で言っている言葉なの。言わなかった言葉が、今私たちに聞こえて来るのよ」

「おばあちゃんが何を思っているのか、分かるんだ」と真菜が言いました。

みんなでおばあちゃんの声を知っていると、蓮が遠くで光っているものに気づきました。

「先生、あそこで何か光っています」

吉田先生が、ハンドルを前に倒すと、部屋が移動を始めました。光のそばにいくと、大きな球があって、そこに何か映し出されていました。

「私のお父さんだ」

「おばあちゃんを目を通して今見えているものが、ここに映し出されているのよ」

「真菜ちゃんのお父さん、なんだか怒っているみたいね」と唯が言いました。

「どうしたんだろう、けんかしているのか

な」と蓮が言いました。

「どんな会話をしているのか、少しだけ聞いてみましょう」

先生が機械の端にある白いボタンを押すと、音が聞こえて来ました。真菜のお父さんは、電話で用事を頼んでいたのに、おばあちゃんが忘れてしまったことを責めているようです。

「朝、電話をして、机の上にある紙袋を駅まで持ってきてほしいって、おばあちゃんにお願いしたじゃないか」

「そうだった？」

「ちゃんと『駅まで持って行く』って言うていたじゃないか」

「そんなこと言ってないわよ」

「はっきり言ったよ」

先生が機械のボタンをもう一度押すと、お父さんとおばあちゃんの声が消えて、次におばあちゃん心の声が聞こえてきました。

「私は聞いていないわ。何かの間違いではないかしら。どうして、こんなに怒っているのかしら……さっき電話をもらったのかな。思い出せないわ。本当に電話をもらったのかな……どうしよう、どんどん怒り出している。私は何も悪いことしていないのに、どうして、こんなに怒られなくてはいけないのかしら」

おばあちゃんは、電話があったことを本当に覚えていなくて、困っている様子でした。

「おばあちゃんがかわいそう」と、蓮と唯が同情しました。

「そうなの。真菜ちゃんのおばあちゃんは、お父さんに言われたことを忘れてしまったようなんだけど、わざと忘れたわけではないし、本当に覚えていないから、どうして怒られているか分からないし、どうすればいいか分からないから困るだけなの」

何かの間違い？

私は聞いてないわ

思いだせない……

どうしてこんなに怒られなくてはいけないの……



真菜が、「どうして、すっかり忘れちゃうのかな？」とぼつりと言いました。蓮もうなずいて、「そうだよね。どうして、思い出せないのかな」と言いました。唯も「頭の中をもっと探検したい」と目を輝かせました。

「分かりました。みんなで、認知症の正体を突き止める冒険に行ってみましょう」

そう言うと、先生は機械のボタンをたくさん押してから、端にあるとても小さなボタンを小指で押しました。すると、今度は全員が吸い上げられて、天高く舞い上がりました。

「うわ〜」

「飛んでる」

「先生、この機械、本当に大丈夫ですか」

「安心して、スペシャルモードで、飛んでいると感じているだけだからあ〜」

「うわ〜」